オスカルの
太鼓が鳴り響く時
喜びが　怒りが
悲しみが　やさしさが
世界中に爆発する!

1979年度
カンヌ映画祭
グランプリ受賞

1980年度アカデミー賞
外国語映画賞受賞

ダーヴィット・ベネント
マリオ・アドルフ
アンゲラ・ヴィンクラー
ダニエル・オルブリフスキ
カタリーナ・タールバッハ
シャルル・アズナヴール

原作・台詞ギュンター・グラス
脚本ジャン・クロード・カリエール
フォルカー・シュレンドルフ
フランツ・ザイツ
監督フォルカー・シュレンドルフ
撮影イゴール・ルター
音楽モーリス・ジャール(サントラ盤 RCAレコード)
製作フランツ・ザイツ＋アナトール・ドーマン

Die Blechtrommel

イーストマンカラー・西ドイツ＋フランス合作
傑作を世界からはこぶ「パウ・シリーズ作品」フランス映画社提供

ブリキの太鼓

監督フォルカー・シュレンドルフ　原作ギュンター・グラス「集英社刊」

Eine deutsch+französische Gemeinschaftsproduktion der Franz Seitz Film+Bioskop-Film+Artemis Film+Argos Films

傑作を世界からはこぶ
バウ・シリーズ
フランス映画社提供

Die Blechtrommel

ブリキの太鼓

監督
フォルカー・シュレンドルフ
原作 ギュンター・グラス
（集英社刊）

＊オスカル

解説

誰が見ても文句なしに楽しい、面白い——そんな映画が現代の純文学を原作としてできるはずがない、できたら奇跡だと思うのが当り前だが、そんな奇跡が実際に起きることを実証したのが「ブリキの太鼓」という映画だ。

原作はドイツ現代文学の旗手ギュンター・グラス。監督は、ニュー・ジャーマン・シネマのリーダーとして人望あついフォルカー・シュレンドルフ。主人公は、少年オスカル。3歳の誕生日に自ら成長をやめる決意をして以後、子供のまま、大人の世界に次々と痛快な事件を起していくのだが、映画化にとりかかった頃、シュレンドルフはこう言っている。《この映画はドイツを描いた壁画のような映画になるだろう。庶民が自ら生き自ら見た世界史の、巨大なスペクタクルにみちた数々の画が、小さなオスカルの目に像を結ぶ。オスカルはたしかに20世紀が産んだ子供だが、私は、彼の性格のうち、とりわけてふたつ、実に今日的だと思う。それは、拒絶と、抗議だ。彼は世界を拒絶するあまりに成長を止める。彼はあまりに声高に抗議するのでガラスをわってしまう。こうした視点で見ると、オスカルは、原作が出版された時（1959年）よりも、今、ますます私たちに身近な存在になっている》

映画は完成と同時に西ドイツで公開され、カンヌ映画祭に出品された。西ドイツでは7週間で300万人の観客がつめかけるという未曽有の大ヒットになった。カンヌでは、フランシス・コッポラの「地獄の黙示録」が突然コンクール作品として名のりをあげてきたため、連日、グランプリは、はたして「太鼓」か、「黙示録」か、それとも2作品一挙同時受賞かと、かってない論戦でわきかえった。結果は2作品ともグランプリを獲得した。「地獄の黙示録」が、映画が完成したことが大事件であったとすれば、「ブリキの太鼓」は映画そのものが大事件であったといえよう。

＊アルフレート・マツェラート

＊アグネス・マツェラート

《「ブリキの太鼓」には、グランプリにふさわしいすべてがそなわっている。歴史的現実に根ざした主題のオリジナリティとテーマの豊かさ、冴えきった演出力、すぐれた俳優たちと、なかでも、辛辣で悪魔的な、小さな証言者オスカルを演じきった驚異的なダーヴィット・ベネント。この映画にはすべてがある。狂暴さとやさしさ、苦悩と錯乱、巨大な黒い笑いと不合理のセンス。シュレンドルフは、グラスの小説のもつ叙事詩的な構造とリリシズムを見事に映像化した》（ル・モンド紙）

心にしみいるようなイゴール・ルターの映像が、雄大で叙事詩的なモーリス・ジャールの音楽とあいまって深く美しい。主役のダーヴィット少年は撮影当時12才で、ミュンヘンのオペラ劇場でドラムの勉強中をシュレンドルフに発見された。マリオ・アドルフ、アンゲラ・ヴィンクラーはシュレンドルフ作品のおなじみ。ポーランドの名優オルブリフスキ、フランスのシャルル・アズナヴール、イタリアからアンドレア・フェレオルと、多彩で実力派ぞろいの演技陣だ。

ストーリー

物語の主な舞台は1899年から1945年に至るダンツィヒ（現在のポーランド領グダニスク）。その郊外のカシュバイの野で4枚のスカートをはいてじゃが芋を焼いていたアンナのスカートのなかに放火魔コリヤイチェクが逃げこみ、やがて生れたのがオスカルの母アグネス。第1次大戦が終って自由市となったダンツィヒで、成長したアグネスがドイツ人マツェラートと結婚し、従兄のポーランド人ヤンと愛しあって生れたのが主人公のオスカルだ。

1927年、オスカル3歳の誕生日。母は約束どおりオスカルに赤と白のブリキの太鼓をくれた。が、この日、大人たちの世界を知りすぎたオスカルはこれ以上1センチだって大きくならないと決心して、太鼓もろとも地下の倉庫に墜落する。以後、オスカルの成長は止まった。が、同時に、一種の超能力がついた。オスカルが太鼓を叩いて叫び声をあげるとガラスがこなごなにわれるのだ。最初は居間の柱時計のガラス、そして街頭のガラスと他愛なかったが、やがて、ドイツの歴史の歩みにつれて、オスカルの叫びも高く大きくなっていく……。

＊ヤン・ブロンスキ

監督……フォルカー・シュレンドルフ
原作・台詞……ギュンター・グラス
脚色・脚本……J.-C.カリエール
フランツ・ザイツ
フォルカー・シュレンドルフ
撮影……イゴール・ルター
美術……ニコス・ペラキス
音楽……モーリス・ジャール
〔サントラ盤RCAレコード〕
編集……シュザンヌ・バロン
製作……フランツ・ザイツ
アナトール・ドーマン

＊

オスカル……ダーヴィット・ベネント
アルフレート・マツェラート……マリオ・アドルフ
アグネス・マツェラート
……アンゲラ・ヴィンクラー
ヤン・ブロンスキ……ダニエル・オルブリフスキ
マリア……カタリーナ・タールバッハ
おもちゃ屋マルクス
……シャルル・アズナヴール
アンナ｛娘時代……ティーナ・エンゲル
老婆……ベルタ・ドレーフス
ヨーゼフ・コリヤイチェク
……ローラント・トイプナー
八百屋のグレフ……ハインツ・ベネント
その妻リーナ……アンドレア・フェレオル
ベブラ団長……フリッツ・ハックル
ロスヴィータ……マリエラ・オリヴェリ

＊

フランツ・ザイツ・フィルム（ミュンヘン）他＋アルゴス・フィルム（パリ）／1979年度西独・仏合作／イーストマンカラー・ヴィスタ（1×1.66）／7巻 3886m／2時間22分

カンヌ国際映画祭グランプリ受賞／アカデミー賞外国語映画賞受賞

4月上旬より
ロードショー

伊勢丹前シネ・タウン
新宿ビレッジ2
（351）3129

特別鑑賞券1200円
（一般1500円・学生1300円の処）
好評発売中！

上映時間	日・祝のみ10:05	12:40	3:30	6:20

●グループ鑑賞及び映画教室のお申込みは㈱メイジャー（541）2508へ。